



149号  
2009/12/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
http://wanli.web.infoseek.co.jp/  
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈胡同内での記念写真Ⅱ〉(写真説明11p)

於:中国北京宣武区 2007年1月16日  
撮影:木村武司

‘わんりい’149号の主な目次

北京雑感(40)「変わってほしい北京Ⅱ」	2
私の調べた四字熟語(38)「 <small>ふうせいかくれい</small> 風声鶴唳」	3
媛媛讲故事(19)「牛郎と織女の伝説Ⅰ」	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	5
中国東北地方(2)「黒龍江の話」	6
土の香りのモダンアート・農民画(5)	8
老陳酢簡単料理・二題	9
12月の歌「故郷之月」歌詞	9
スリランカ紹介(34)「ジャフナ珍道中区」	10
表紙写真について	11
私の四川省 一人旅(30) 垂丁⑦	12
アフリカとの出会い(38)「ケニア人ママ」	14
アジアを読む(番外)	15
‘わんりい’活動報告・夢広場参加	16
‘わんりい’掲示板	17~18

♪「中国語で歌おう!会」12月の歌 ♪

美しい月に遠く離れた故郷を偲ぶ

〈故郷之月〉

péng bāng zhēn 作词 彭邦楨 liú zhuāng yán shēng 作曲 刘庄, 延生  
(歌詞9p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口  
徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

12月18日(金) 19:00 ~ 20:30

●指導: zhào fèng yīng 趙鳳英 (中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●参加費: 1500円 (体験無料)

●「中国で歌おう!会」

‘10年1月の講座日: 1月29日(金)

\*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局  
(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。

バス停に続いて、「変わって欲しい北京」の二番目も、やはり交通に関することです。

少し前に、中国の自動車販売台数が世界一になったとの新聞記事を目にしましたが、ここ何年かの北京における自動車交通量の増加を見てきた人間としては、「今頃やっと世界一なの？」という気がします。

20世紀が終わろうとする頃初めて北京を訪れた時、大学の所有する車を手配していただいて市内観光をしたことがあります。年季の入った車で自転車の洪水の中を、遠慮がちに走っている印象でした。当時は、自家用車が非常に少なく、バス・トラック以外は殆どが公用車でしたから、街中の商店街で車を停めて降り立つと、それだけで人々の注目を浴びて気恥ずかしい思いをしたものでした。

それが年を追うごとに自家用車が増え、自転車が少なくなった道を我がもの顔で走るようになって来ました。ご存知のように北京の中心街は、長安街の片側6車線を別にしても、大部分が片側3車線以上あり、非常にゆったりしています。追い越しも儘ならないような狭い道を走り慣れた身には、こんな広い道を走れたら渋滞も無く快適だろうと羨ましく思ったものですが、自家用車が増え出した5、6年前頃から、こんな道でもしばしば渋滞が起るようになりました。

オリンピックが近づいて、地下鉄や道路の拡幅など工事の影響で一時期渋滞が発生することが多くなりましたが、時期を同じくして車の台数が急激に増えたので、工事とは無関係の道路にも渋滞が頻発しました。片側3車線もある直線的な道路でどうして渋滞が起こるのか不思議でしたが、ある時、バスの一番前に座って1時間以上渋滞の中を走って、その原因を私なりに理解することが出来ました。

原因は、一言で言うと、運転者のマナーの悪さだと思います。運転者に譲り合いの気持がありません。バスが内側の車線を走っていて、バス停が近づいたので外の車線に出ようとするのですが、外側を併行して走っていた車はバスに道を譲りません。前のバス停には先のバスが停まっていて、そのままは行けないのに譲りません。バスの前で内側車線に入る積りなのですが、バスもそうはさせません。

お互いに譲らないで、バスはバス停で外側の車線に停まって乗客の乗り降りをさせます。バスの2列駐車です。そこで3車線のうちの2車線がつぶれてしまいます。一番内側を走っていた車はバスを追い越してスイスイ行くので、バスの後ろについた車はその車線に入ろうと強引に鼻を突っ込みます。内側の車も譲りませんから、事故

寸前の状態で止まったりして、バスの後でも渋滞が起きます。

そんな時、バスの上から車を見ると、車線に斜めに突き刺さるようになって動きが取れなくなっているのです。3車線の道路に車が4台も5台もひしめいていることがあるのには驚かされます。

初めのうち、バスの外側を走る車がバス停の前でバスに車線を譲らないのが悪いと思ったのですが、見ていると、事はそう簡単でないことが分かりました。若し、その車がバスに道を譲ったとすると、バスの後を走っていた車がどんどん先に行って、譲った車が入ることを許しません。又、バスが外側車線の車に道を譲ると、その車の後ろについた車がどんどん入ってきて、なかなか外側車線に行けないのです。

日本では暗黙の了解になっている「合流は一台ずつ」などというのは夢物語です。又、バスが外側車線の車を先に行かせようとする、後続の車が次から次へと入って来て、外側車線へはなかなか行けないので譲れません。北京のドライバーは、公共車輛だからと言って遠慮はしないようです。

以前、西四の交差点で信号待ちをしている時、信号は緑になりましたが先がつかえていて動いていないのに、後続車がどんどん交差点に入って来ました。そのうちに信号は赤になりましたが、交差点内の車は動けず、横切るほうの信号が緑になっても一台も渡れませんでした。日本だったら、先がつかえていれば信号が緑でも交差点内に入らずに待ちますが、北京では行かないと、隣車線の車が進んで前を埋めてしまいますから、自分も行かなければならないのです。これも渋滞の原因の一つと納得しました。

日本も、何十年か前には随分運転マナーの悪い時期がありました。時間の経過とともにマナーも向上しました。それを考えれば、一般市民が車に乗るようになってまだ4,5年しか経っていない北京の人々の運転マナーが悪いのは仕方がないことかも知れません。中国には自己主張の強い人々が多いので、運転マナーの徹底には少し時間がかかるでしょうが、案外、オリンピック以降現在も行われている、曜日ごとにナンバープレート末尾数を指定しての運転制限のように、公安の介入が有効でしょう。結果としてマナーが向上すれば、この運転制限は必要なくなるのですから、一石二鳥だと思います。

運転マナーさえ向上すれば、あの広くて走り易そうな道路なら、車が今より増加しても、現在のような渋滞は無くなるはず。大いに期待しましょう。

今回は少し怖い話です。皆さんは夜更けにたった一人でいるとき、どこか外で「ガサゴソ」と変な音が聞こえたとしたらどんな想像をしますか？ 犬がその辺を歩いているのかもしれない、誰か居るのかな、もしかしたら泥棒かもしれないと、何となく不安なことばかり思い起こすかもしれません。ちょうどお風呂にでも入っていたら、裸で逃げ出すことも出来ない。不安が不安を呼んでますます恐ろしくなる。そのような状況を表しているのが四字熟語「風声鶴唳(ふうせいかくれい)」です。

辞書を引いて見ますと、

▲三省堂大辞林では、

「風声鶴唳：風の音や鶴の鳴き声を聞いた敗残兵が敵兵かと思ひ驚き恐れたという、晋書・謝玄伝の故事から、おじけづいた人が、わずかのことに恐れおののくことのたとえ」

▲小学館中日辞典では、

「fēngshēnghèlì 風声鶴唳：おじけづいてちょっとしたことにもおののくたとえ」

と載っています。文字も意味も日中で全く同じです。

この成語の由来は、〈晋書注1・謝玄伝〉の「坚众奔溃，余众弃甲宵遁，闻风声鹤唳，皆以为王师已至，草行露宿，重以饥冻，死者十有七八。」の部分です。

**意訳：**苻堅注2の兵たちは敗走して逃げまどい、その他の多くの兵も鎧を捨てて夜道を逃走した。途中風の音や鶴の鳴き声を耳にして、どの兵もことごとく敵の王軍がすでに追いついて来たかと恐れ、草をかき分け進み野宿をし、厳しい寒さと飢えとで死者は十人の内七八人にもなった。

五胡十六国時代注3・公元383年、前秦の皇帝苻堅は90万の大軍を率いて東晋を攻めるため南下しました。

東晋側は謝石を大将に謝玄注4を先鋒に任命して8万の精兵を連れて敵を迎え撃つことになりました。苻堅は自分には多くの兵がいるので勝利は確実と思っていました。彼は兵力を寿陽(今の安徽省寿县)の東の淝水河の辺に集結し、後続の大軍が到着したら晋軍に向かって進攻を開始することにしていました。

一方(晋軍の)謝玄は大軍が国境に迫ってくる中、双方の兵力の差が非情に大きい状況下でまともな戦法ではとうてい勝ち目がないと考え、ある計略を実施するこ

とにしました。そこで秦軍の先頭部隊に向かって、

「双方が河を挟んで対峙していたのでは戦いにならない、どうだろう秦軍の先頭が少しだけ後ろに退いて、わが軍に渡河させてもらえまいか？ その後に岸で思う存分に戦おうではないか」

と持ちかけました。

秦軍の大部分の将軍たちは、「我々は後続の大部隊の到着を待って決戦をする計画なのだから、今晋軍に渡河させることはまずい」と反対したのですが、苻堅だけは勝ちを急ぐ気持ちが強く、晋軍に河を渡らせて、渡っている最中に攻撃すればいいと言って秦軍に後退を命じたのです。

すると苻堅が予想もしていなかったことが起こりました。秦軍は後退の命令を受けると、兵たちは自軍の先頭が戦いに敗れたと思ひ込み、皆慌てて敗走をはじめたのです。

謝玄はこの機に乗じて部下たちを急いで渡河させ、その勢いで敵に突撃するよう指示を出したのです。その様子に秦軍はますます慌てて敗走しながら武器を投げ捨て、隠れる場所を探しながら逃げまわりました。途中ざわざわする風の音や鶴の鳴き声がみな晋軍の追手の声に聞こえ、どこまでも追いかけて来るように思われたので、恐ろしくて昼も夜も見境なく、死に物狂いで逃走したのです。

こうして晋軍は勝利を得ることが出来ました。この戦いを「淝水の戦い」と呼んでいます。

■注記(フリー百科事典『ウィキペディア』より)

1) **晋書(しんじょ)**：中国晋王朝(西晋・東晋)について書かれた歴史書。二十四史の一つ。唐の648年に太宗の命により、房玄齡・李延寿らによって編纂された。帝紀十卷・載記(五胡の単于・天王・皇帝に関する記述)三十卷、列伝七十卷、志二十卷によって構成される紀伝体。(紀伝体は、東アジアの歴史書の書式の一つ。)

2) **苻堅**：五胡十六国時代の前秦の第3代皇帝。華北を一時統一し、中国統一を目指したが、軍を南下させたところを淝水の戦いで大敗し、目的を果たせなかった。

3) **五胡十六国時代(ごこじゅうろっこくじだい)**：五胡十六国時代の前秦の第3代皇帝。華北を一時統一し、中国統一を目指したが、軍を南下させたところを淝水の戦いで大敗し、目的を果たせなかった。

4) **謝玄(343～388年)**：中国東晋の将軍。字は幼度。宰相・謝安の甥。謝氏の本貫(本籍地)は、陳郡陽夏(現河南省太康県)。

## 風声鶴唳(ふうせいかくれい)

私が調べた四字熟語

38

三澤統

牛郎と織女は元々天界の星で、牛郎星と織女星と呼ばれていました。二つの星の間はあまり隔たっていないので、長い間お互いに助け合う内に心が通い合うようになり深い愛を育んでいました。しかし、天界では男女は勝手に愛し合うことは許されていません。それが天帝や西王母に知られたら大変なことになります。二人は厳重な処罰を受けるに違いないのです。

実は織女は天帝の孫娘で、織物の名手でもありました。天界の仙女たちを取り仕切る西王母は織女に厳しい罰を与え、織女を部屋に閉じ込めて、「この家を出てはいけない!」「色々な種類の霞のような錦を織っていなさい!」と命じました。

織女が織る織物はそれはそれは素晴らしいものでした。霞のように淡く微妙な色合いに染め上げられているばかりではなく、季節の移ろいと共に、彩りも綾に美しく変わって行くのだそうです。西王母は、織女が織った布を世の女性たちの織物の手本にしようと思い、毎日のように織女の織物を天辺に広げて人々の目に入るようにしました。天空に架かる虹や、霞や、夕焼けなどはいずれも織女が織った織物なのだそうです。

一方、牛郎も天帝の処罰を受け、人間界に下り、ある貧乏な農民の家に生まれました。牛郎が三歳の頃、両親が亡くなり、兄さんの元に育てられることになりました。しかし、兄嫁は意地悪で冷たい心の持ち主でしたので、幼い牛郎を厳しく働かせたり、牛の番をさせたりして、辛い生活を強いていましたが、ある日、

「今日は、この九頭の牛を山に連れて行って草を食べさせなさい。でも帰りには十頭の牛を連れて

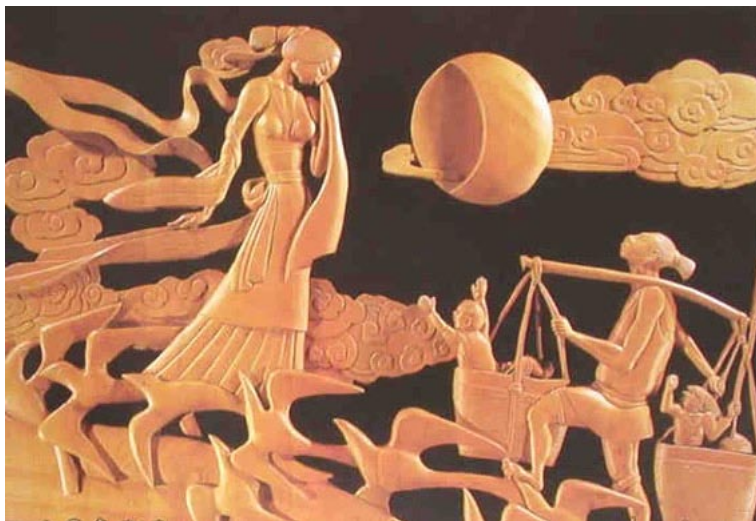
来ないと家には入らせません!」

と牛郎に強く言いわたしました。

九頭の牛をどうしたら十頭にすることができるのでしょうか。牛郎が思い悩んでいたところへ長く白ひげを生やしたおじいさんが現れました。「山の向こうに病気の老牛がいる。ちゃんと世話をしてあげなさい。治れば十頭になる筈じゃろうが」と告げました。

牛郎が髯のおじいさんの言うとおりに山の向こうに行ってみると、病気の老牛が見つかりました。

優しく細やかに何日も面倒を見ていたうちに老牛はすっかり回復して元気になりました。牛郎はきっと兄嫁が喜ぶに違いないと思い老牛も加えて十頭の牛を引いて家に帰りましたが、兄嫁は全く働くことのできない老牛を見ると喜ぶどころか却って大変な怒



りようでした。

その後何年か経て牛郎がもう少し成長すると、「お前はもう大人だ。一人で暮らしなさい。だからといってこの家からは何も持って行ってはいけない!」と兄嫁が牛郎に強く言い渡しました。牛郎は、

「私が連れてきた老牛は年をとってすっかり身体が弱っているから多分長く生きていられないと思います。私と一緒に行かせてください!」と頼みました。兄嫁はその老牛はもう使い物にならないと思っていましたので、牛郎の願いを聞き入れ、牛郎は老牛と一緒に暮らすことになりました。

さて、天界の織女の方ですが、彼女は毎日部屋に閉じ込められて、夜も昼も手を休めることなく錦を織り続けていました。それにしても西王母からの仕事は後から後から続き終わる日が見えません。疲れきった織女は終に西王母に願い出ました。

「お姉さんたちが懐かしいわ。一緒に河辺で水浴

びをさせてください。」

西王母は、

「織女は天帝のお孫さんでもあるのだし、お姉さんたちと少しの間遊ばせてもよいでしょう」

と承知しましたので、織女はお姉さん達を誘うと人間界にある壁蓮池という美しい河へ遊びに行きました。

家を出た牛郎は、日中は老牛と一緒に畑仕事をし、夜は老牛と一緒に食事をし、一緒に寝て、お互いに頼り合って静かな日々を送っていました。寂しい時や嬉しいこと、悲しいことがあった時、牛郎はごく自然にいろいろと牛に話しかけました。老牛は黙々として何も語りませんでした。その眼は「うん、俺はお前さんのいうことは何でもよく分かるよ」と言っているような優しい光を放っていました。

ある日、老牛が突然口を開きました。

「お前さん、明日の夕暮れ頃、壁蓮池辺の桃林に行ってください。桃の実がなっている木に七色の衣が掛けてあるが、それは七人の仙女が水遊びをするの

で脱いだ衣なのです。その中の桃色の衣を持っていらっしゃい。その衣を着ていた人があなたの妻になるんだよ」

と言いました。

実はこの老牛は、もともと天界の金牛星で、天界の規律に違反した為に下界に下されていたのでした。それと知らない牛郎は、老牛の話を聞いて大変びっくりしました。が、決して嘘をいう筈のない忠実な相棒の話なので信じました。 (続く)

### 【'わんりい' の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報 'わんりい' は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

\*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

## 松本杏花さんの俳句「余情残心」より

色付きて意外に多き柚子の生り

guǒpí sè biàn huáng  
果皮色变黄

shuòguǒ léilí chāo yùxiǎng  
硕果累累超预期

yòu zǐ chéngshú yàng  
柚子成熟样

季语：柚子，冬。

赏析：诗中的柚子树枝繁叶茂，果实未变色时，作者不知道看了多少回。秋去冬来，黄澄澄的果实凸现出来，硕果累累，真是望外之喜！

作者此时肯定比品尝柚子更加高兴。



柿落葉夜半の雨に艶を増す

xīfēng cuī shì yè  
西风摧柿叶

yèbàn lěng yǔ bù tíngxiē  
夜半冷雨不停歇

mèng dōng zēng yàn zé  
孟冬增艳泽

季语：柿落叶，冬。一般落叶指秋天，而柿子为初冬结果，落叶较迟，所以柿树落叶指冬天。

赏析：夜半冷雨本无色，只因柿叶增艳泽。作者将听觉感受转化为视觉美感，将无色的寒冷风雨转化为飘零的鲜艳柿叶，令人耳目一新。

我国柿词中感官相通的例子也很多，如宋朝张炎《清平乐》中的“只有一枝梧叶，不知多少秋声”，就属此类。由此可见，诗词的创作与欣赏是无国界的

中国の東北で一番北にある省は黒龍江省です。その省の首府ハルビン市に親戚が住んでいましたので、まだ幼い子供だった頃に訪れたことがあります。はるか昔のことなので詳しいことはあまり覚えていませんが、市内を流れる川がとても大きく、子ども心にこの河が黒龍江に違いないと思い込んでしまいましたが、実際はこの河は松花江と呼ばれる黒龍江の支流でしかありません。

その松花江の真ん中に島があって、太陽島といい、夏になると多くの人々が涼を求めにやって来てとても賑やかでした。80年代にその情景を歌った「太陽島上」が大ヒットになり、全中国人がハルビン市の名前より太陽島の名前を知るようになりました。黒龍江の支流に過ぎない松花江でさえこれほどに大きい河なのだから、黒龍江はもっと大きい河に違いありません。しかし、地図で確かめるまで黒龍江はどこを流れているのかははっきり知りませんでした。

中国の省や自治区の中には、湖、河そして江の漢字がつく名前が多くありますが、動物の名前が付けられたところは殆どありません。まして実在しない龍の名前がついているのは黒龍江省だけです。龍は中国人にとって特別な存在ですが、黒龍江にはその龍にまつわる話があります。幼い頃、その話を読んで深い感銘を受けました。皆さんに紹介しましょう。

昔、黒龍江は黒龍江という名前ではなく、河に白い龍が住んでいたのが白龍江という名前でした。その白い龍は悪者でいつも洪水を起しては河の兩岸の人々に災害をもたらし、しばしば人間の子供を食べてしまうことさえもありました。しかし人々はそんな龍に立ち向かう術もなくただ逃げるしかできませんでした。しかも人々は毎年、白い龍に貢物を献上しなければなりません。そのため、白龍江の周辺に住む人々は少なく、生活は大変苦しいものでした。

その頃、山東省の海辺に李さんという夫婦が住んでいました。結婚して既に十何年経っていましたがまだ子供に恵まれていませんでした。しかしある日のこと、奥さんが外で仕事をしていると突然大雨が降り始め、雷に打たれました。そしてその後、幸運なそして不思議なことに奥さんは妊娠し、予定日よりずっと遅れましたが、男の子を無事出産しました。その子供は皮膚が黒っぽい以外は普通の子のように見えたが、とても大喰いでびっくりするような成長のはやさでした。



画：叶 霖

ある日、奥さんは家でお乳を飲ませながら子どもと一緒に寝てしまいました。と、子供は黒い龍の姿に変身し、しっぽがどんどん長く伸びてゆき、なんと玄関の外にまで伸びて、気持ちよさそうに振られていました。

李さんがこの日たまたま早く家に帰ると、家の中から黒いしっぽが伸び出しているではありませんか。何か得体の知れない怪物が家のなかに侵入したと思い、すばやく腰刀を取り出すと一振りしてしっぽを切り落しました。龍はあまりの痛さでびっくりして目を覚ますと跳ね上がり、屋根を突き破ってそのまま、空高く飛んで逃げてゆきました。

さて、話は前に戻りますが、白龍江のほとりに年配の男が一人で住んでいました。ある日、黒い服で身を包んだ若者がやって来て、宿を貸して欲しいと男に頼みました。男は快く承諾し、食べ物を用意して食べさせました。若者は大変な大喰いで、男の三日分の食料を食べるとすぐ寝てしまいました。

翌日の朝、若者は「夜にまた戻ってくる」と言うので河に沿って東の方に出かけて行きました。すると、見る見るうちに東方の空に黒い雲が湧き上がりただならぬ様子になりました。

この日、男は若者のために前夜より多くの食事を用意しました。夜になると若者が帰って来ましたが疲れ果てている様子でした。そして男が用意した食事を全部食べ終わるとすぐ寝てしまいました。

男が眠ると夢の中に黒い龍が現れました。そして夢の中で若者が男に告げて言いました。「私は山東省から来た、

禿げしっぽの李といいます。当地に性質の悪い白い龍がいるというのを聞いてたので退治するためにやって来ました。今日はその噂の白龍と戦ったが、勝負をつけることが出来ませんでした。明日も白い龍と戦います。しかし私はまだ力が不足で勝つのは難しいのです。どうか戦いを手伝ってください。明日は白い饅頭と石をたくさん用意してください。そして、白い龍を見たらその石を投げつけてください。」

男が目が覚ますと、若者は既にいなくなっていました。男は急いで夢のことを仲間に伝えますと、なんと皆同じ夢を見ていたのだそうです。人々は、黒い龍が自分たちのために戦ってくれるというので、皆で沢山の饅頭と石を用意すると、戦いの応援をしたいと東山に登って行きました。河は朝から白浪と黒浪が交互に立ち上ってはぶつかり合っていて、まるで何かが戦っているように見えました。そうです。白い龍と黒い龍が戦っているのです。空は黒い雲で覆われ、風が吹き荒れていました。その戦いはとても激しいようでした。

人々は太鼓を叩いて黒い龍に声援を送りました。時々、河の中から黒い影が現れて黒い手を伸ばして来ると皆一斉に饅頭を投げ与えました。その様子を見た白い龍が同じように白い手を伸ばして来ると、皆一斉に石を投げつけました。こうして、戦いが一日中続いた夕方、遂に白い影が河から飛び出し、空高く飛んで行き、その後を黒い影が追うよう飛んで行きました。その二つの影を見た人々は黒い龍の勝利と確信して大きな声で歓声をあげました。

その後、白い龍が出ていった河に黒い龍が住むようになり、河は人々に福をもたらす河となりました。人々はこの事を記念し黒龍江と呼ぶようになったということです。

上の物語は、黒龍江の名前にまつわる民話ですが、違うバージョンもいろいろあるようです。例えば、黒い龍の両親は夫婦ではなく、兄と妹と一緒に住んでいましたが兄が長い留守を続けた時、妹が海辺に寝て知らないうちに妊娠したというような話もあります。しかし、生まれた子どもが黒い龍で、その龍のしっぽが切り落とされることはどの話にも共通しています。

話がこれだけで終わらずに、別のところに逃げた白い龍に黒い龍が再び戦いを挑んだという話もありますし、また、白い龍が逃げる際、身を隠すために松の花を河中にばら撒いたというので、その河が松花江と呼ばれるようになったという、松花江の名前の由来にまつわる話もあります。黒い龍は心優しいだけではなくとても親孝行で、毎年、母親を見舞うために帰省するらしく、それに纏わる地名もあります。しかし、これらが全ていい伝えられてきた話なのか、或いは現代人が創作したものなのか定かではありま

せん。悪ものにされた白龍ですが最終的に殺されませんでしたので、ハリウッドの映画のような続編も作られているそうです。これら民間に伝わる話からいろいろと想像をかき立てられますが、黒龍江という名前は、早くも13世紀の文献に登場している古くからの名称であるのは間違いないことです。

上記の話では、黒龍江を中心に中国人がその両岸に住んでいたということですが、地図を調べましたら、黒龍江の全てが中国の中に入っていないことを知りました。河の一部分はロシア領に含まれ、その大部分は中国とロシアとの境界となっています。実は、黒龍江はもともと中国圏内の河でしたが、19世紀中頃、清がロシアとの戦争で負けた結果、その後ロシアの勢力が黒龍江を越え、旅順や大連までに及んだのです。その影響で、黒龍江省の首府ハルビン市にはロシア文化の面影がいまだに多く残っています。

私はハルビン市という名前はロシア語に由来するのではないかと考えていましたが実はなんと満州族の言葉に由来するらしいのです。黒龍江省を含め、東北地域は満州族の発祥地でした。しかし、満州族のほかにも幾つか在来の少数民族が住んでいました。黒龍江の話は、内容から漢民族にだけ伝わっている民話のようで、漢民族の郷愁さえも漂わせています。しかしこの話が漢民族に起源する民話とすれば、黒龍江省にもともと住んでいた、在来の各少数民族にも黒龍江にまつわる言い伝えがあるはずですよ。それはどんなものでしょう？とても興味を感じます。



**黒龍江と松花江**  
黒龍江の一部分は中国とロシアの国境でもある。

上海の街に木枯らしが吹きはじめる頃、街路樹の梧桐（マロニエ）から黄金色の大ぶりの葉が舞い落ちてきます。

自分の顔ほどの大きさのものもあり、踏みしめるとクリスピーな音がします。栗を煎って売っている大きな鉄なべからは、香ばしいかおりが漂います。

迫りくる寒気に備え衣を重ねるこの時期にも、嬉しい風物詩はたくさんありますが、中でも上海毛ガニは不動の人気があります。上海在住の頃は、外で食べると高いのでもっぱらスーパーで求めて自宅で蒸していただいていた。

一番印象に残っているカニにまつわる思い出は、「カニとのかくれんぼ」。ちょっと留守にしている間に、しばっておいた紐が緩んだのか、ビニール袋に入れておいた6匹のカニがみな逃げ出してしまったことがありました。家族総出で捜索しました。なかなか見つからなかった最後の一匹は、あきらめかけた頃、カーテンの陰で泡を吹く音を手掛かりに発見されました。

さて、絵の中のカニは、双喜の文字とともに左右対称の構図を演出してくれています。裏返しになってお腹を見せているカニがいますが、このお腹の、ハシゴの様に描かれている部分に指をかけ中を割って食べ始めるのが正統派だそうです。上海人の皆さんは足をもいで、その尖がっている部分をピックの様に身をほじる道具にします。一匹のカニを余すところなくとっても上手に食べるので感心します。

中国各地の農民画の中でも、絵にカニや漁の風景が描かれることはめづらしく、上海（金山）の農民画の特徴となっています。



絵：張 新英 「漁家酒」（上海・金山農民画院）

## 【COFFEE BREAK】 黒酢の妙用

今年も12月になりました。期待の21世紀を迎えて早9年、巷に漂う閉塞感は今だ晴れやらぬ上に、「新インフルエンザ」などあまり望ましくないものが流行っているようです。

何媛媛さんに教えていただいた、山西省の黒酢「老陳酢」インフルエンザ予防法で早めに邪気を祓っておきませんか。

中国には優れた酢がいろいろあるようですが、「老陳酢」は、山西省の名酒「汾酒」の原料と同じ、高粱、大麦、エンドウ豆などを蒸して酵母を加えて発酵させ、長年寝かせて熟成させたもので、豊富な天然アミノ酸と天然クエン酸の含有量が非常に豊富なのだそうです。

さて、何媛媛さんに教えて頂いたインフルエンザ予防法は、『老陳酢、200～300ccを鍋に入れて、弱火で沸かす』

それだけなのですが、その匂いに殺菌効果があるそうです。「少々匂いが強いので、果たして日本人の皆さんに受け入れて頂けるでしょうか」何さんは気にしています。

昨年、山西省旅行の折、ガイドさんをお願いして太原市内の「東湖」という、昔ながらの製法による「手作り・老陳酢」の工場に連れて行って頂きました。発酵中の老陳酢の大きな甕がずらりと並べられた部屋は、強烈な香りが充満して息がつけられないほどでした。殺菌力の効果はてきめんに違いありません。

最近では、日本でも各所で手に入れられる「老陳酢」です。毎日、杯にいっぱいほど頂くのも保険効果があるそうです。又、お魚の煮付けや、きんぴらなどやや濃い目の和風醤油味の煮物にも隠し味程度加えると味がぐう～んと深くなりますよ。  
(田井)



## 老陳酢 (中国山西省の黒酢)・簡単料理二題

指導：何媛媛

### 糖酢白菜

【材料】(4人分)

キャベツ 大1/2個 唐辛子1~2本  
ニンニク1片(押しつぶしてザク切り)  
砂糖、お酢



【作り方】

- 1 キャベツを手で一口大の食べやすい大きさにちぎって炒める直前まで水に放しておく。
  - 2 鍋にサラダ油を入れ、熱になったらニンニク、唐辛子を入れ、香りが出たら、水をよく切ってキャベツを入れ、強火で手早く炒め、老陳酢、砂糖、塩、味の素を加える。
- ◆ 調味料の分量は各自の好みでどうぞ。歯ざわりが残るよう炒め過ぎないのがコツです。お酢は絶対に老陳酢がお勧めで、一味も二味も違います。
- ◆ 薬品並みに免疫力を高め、老化防止効果があるというキャベツがいくらかでも食べられてしまいます。

### 糖醋咕嚕肉 (老陳酢をつかった酢豚)

【材料】(4人分)

肩ロース300g、ピーマン1個、卵1個  
パプリカ(赤と黄、各半個)、玉ねぎ半個、ニンニク、  
サラダ油、黒酢、片栗粉、トマトケチャップ、砂糖、  
葱生姜、料理酒

【作り方】

- 1 肉を一口大に切る。
  - 2 塩、酒、卵、片栗水を加え、10分ほど置く。
  - 3 ピーマン、玉ねぎを乱きり、ニンニク、葱、生姜は微塵に切る。
  - 4 油を凡そ170~180℃に熱し、①に片栗粉をまぶして、1個ずつ狐色に揚げる。
  - 5 鍋に油大さじ1杯を熱し、みじん切りの、ニンニク、葱、生姜を入れて香り出する。
  - 6 ⑤の鍋にピーマン、パプリカ、玉ねぎを加えて炒める。
  - 7 ⑥の鍋に黒酢大匙2、砂糖大匙1、トマトケチャップ大匙1を加え、更に片栗水を加えて、④の肉を入れ鍋のソースとよく混ぜ合わせる。
- ◆ 少々手間がかかりますが、お正月料理にもなる味の深い酢豚です。‘わんりい’料理交流会より

## 「月之故乡」

作词 彭邦桢 作曲 刘庄, 延生

tiānshàng yīgè yuèliang  
天上一个月亮

shuǐ lǐ yīgè yuèliang  
水里一个月亮

tiānshàng de yuèliang zài shuǐ lǐ  
天上的月亮在水里

shuǐ lǐ de yuèliang zài tiānshàng  
水里的月亮在天上

tiānshàng yīgè yuèliang  
天上一个月亮

shuǐ lǐ yīgè yuèliang  
水里一个月亮

tiānshàng de yuèliang zài shuǐ lǐ  
天上的月亮在水里

shuǐ lǐ de yuèliang zài tiānshàng  
水里的月亮在天上



dī tóu kàn shuǐ lǐ  
低头看水里

tái tóu kàn tiānshàng  
抬头看天上

kàn yuèliang sī gùxiāng  
看月亮 思故乡

yīgè zài shuǐ lǐ yīgè zài tiānshàng  
一个在水里 一个在天上

kàn yuèliang sī gùxiāng  
看月亮 思故乡

yīgè zài shuǐ lǐ yīgè zài tiānshàng  
一个在水里 一个在天上

kàn yuèliang sī gùxiāng  
看月亮 思故乡

yīgè zài shuǐ lǐ yīgè zài tiānshàng  
一个在水里 一个在天上

【故乡の月】

そら 天に月 / 水の中に月 / 天の月は水の中に  
水の中の月は天に / 天に月 / 水の中に月  
天の月は水の中に / 水の中の月は天に

そら 水を覗いて / 天を見上げ / 月を見ては故郷を思う  
ふるさと 水の中に月 / 天にも月 / 月を見ては故郷を思う  
水の中に月 / 天にも月 / 月を見ては故郷を思う  
水の中に月 / 天にも月 / 月を見ては故郷を思う

## ‘わんりい’おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

今回はLTTEのキャンプ場で一夜を明かす事になり、シンハラ人の男達は簡易宿舎に囲まれた広場の中央でワイワイガヤガヤと議論を始めたので、僕は議論に加わらずにキャンプの中を探検してから車に戻ったところで終わりました。

僕が議論に加わらなかった理由は幾つかあります。

シンハラ人だけならばシンハラ語だけで話が進みますが、僕が入ると僕はシンハラ語が話せないし、シンハラ人の中には英語が話せない人も居るのでシンハラ語から英語に、そして英語からシンハラ語に通訳する必要があります。只でさえこの人達の議論には時間が掛かるのに、通訳に時間が掛かる事と議論が一端中断する事によって倍以上の時間が掛かるからです。

何故こんなに時間が掛かるかという、僕に通訳している間にもどんどん議論を進めてくれれば良いのですが、こういう場合にはスリランカの人達は僕をじっと見つめて反応を注視し、僕が何らかの反応をするまでの間は議論を止めてじっと待っています。そして僕の反応が良さそうだと感じると嬉しそうに、反応が悪いと感じるか幾ら待っても反応が無いと感じると落胆するのが手に取る様に判ります。これの繰り返しになるので倍以上の時間が掛かってしまうのです。

それから、外国人が加わると本音ではなくて余所行きの事を言ったり、格好をつけたりして目立ちたがる人が出てきて、議論があらぬ方向に進んで元の話に戻れなくなる事も多々あるからです。さらに、僕はタミール側に立った意見を言ってしまうので袋叩きになる事はないまでも、火に油を注ぐ事になって議論が白熱して収拾がつかなくなって余計に時間が掛かる事になってしまふでしょう。

少しでも早く議論を終わらせて欲しい僕は、車に戻ってスナック菓子をつまみつつ内緒で持ち込んだビールを飲んでシンハラ人達の議論を見ていました。2時間ほど経ち、酔いと眠気が襲ってきた頃になって漸く議論が終わりました。

声を枯らすほど興奮して大声を出し、且つ時間をかけて議論をして出した結論は、自警団を組織する事と手持ちの食料を集めようという事だけでした。そんな事なら2～3分も話せば分かる事だろうと拍子抜けしてしまいましたが、色々な意見が出て取捨選択した結果なんだろうと思うことにしましょう。何時もと同じようにこんな調子で3時間近く議論を続け、議論自体を楽しんで満足したのでしょうか、LTTEキャンプで1泊する事を受け入れられた様子です。

議論が終わると男達は車に戻ってそれぞれがサロンと

呼ばれる腰巻のような民族衣装に着替え、上半身は裸でシャワーを浴びに貯水塔の方向に出かけていきます。何は無くとも水浴なのでしょうが折角長時間の議論を経て、自警団を組織し手持ちの食料を集めようと決めたのに誰も行動を起しません。議論で疲れてしまったのでしょうか。それとも一仕事終わったのでシャワーを浴び少しの間だけ休憩をしてから行動を起すのでしょうか、先程までの緊迫した感じは全くありません。

そして、0時を過ぎた頃になって漸く男達が動き始めました。男性全員が自警団として不寝番をするのだそうです。僕は外国人だから寝ていてくれと言われましたが、面白そうなので志願して自警団に入れてもらいました。

でも、自警団とは言っても車に備え付けの工具ぐらしか武器になる物がありません。一番役に立ちそうなスパナとジャッキアップ用の棒を各自が持ち出しています。本人達はしごく真面目なのですが、サロンを腰に巻きつけて上半身裸で工具を掲げ持っている姿では様にならない事この上ありません。

既に女性達と子供達は車内や車の陰でぐっすりと寝ています。武装(?)を終えた男達は次に女性達や子供達を起こして車を移動させ、広場の中央に車の頭を外側に向けて円陣を作り始めました。ちょっと大袈裟すぎて、思わず映画で見た幌馬車隊とインディアンの攻防の様子を思い出してしまいました。

円陣を完成させるとバッテリーを保たせるために1台だけヘッドライトを点灯しました。朝まで30分おきに順番に点灯するのだそうです。

そして女性達に食料を出すように言ったのでしょうか。当然の如く、無理矢理起された女性陣からは非難の嵐です。スリランカの女性は家庭内では最大権力者なので、男達が議論の末に出した自警団を組織する事と食料を拠出する事に文句をつけ始めています。確かに夜明けまでは4時間ぐらしかないので自警団なんて何もする事がないだろうし、万が一にも襲撃されたとしても自衛する術もありません。また、こんな真夜中に食料品を集めても仕方がないと、僕も思いました。

それでも、男達はタミール系住人から襲撃される可能性があるとか、明日になっても開放されるとは限らないので食料品は集めた方が良いなどと一生懸命に説得していますが女性達からは相手にされずに、食料品は全く集まりません。そんな事をしている中にも時間は経過していきます。女性達は再び車内や車の周辺で寝はじめました。自警団の団員達は、何をしてもなくウロウロしているうちに夜が明けようとしています。 (続く)

12月号も私がテーマとして写真を撮り続けている、北京の路地裏・胡同内での記念写真の1枚です。

前号でも紹介した様に、胡同内には決して派手ではない普通の北京の人々の生活があります。そういう風景が私の心の中で安らぎを感じさせられるのです。

この写真は中国・北京の正月(春節)を前にした、ごく一般的な家庭の記念写真です。冬は陽光が少ないだけに余計寒さを感じる時期ですが、北京の住宅事情の関係でそれほど大きくはない家に、老人を中心に家族の心の暖かく寄り添って生活している様子が私に伝わって来ます。

最前列におばあちゃん、右後ろ(右から2番目)がおばあちゃんの娘、一番右側がおばあちゃんの娘の娘(孫娘)、中央の青年は孫娘のフィアンセ、その左がおばあちゃんの娘の夫、その左隣がおばあちゃんの娘の夫の妹です。おばあちゃんを中心とした中国の一家族の家族関係の暖かさが、みんなの顔から覗えるような気がしないでしょうか。

北京市も交通機関が発達して、今では郊外にも高級マンションが林立する時代になりました。が、市内の中心部でもかなりの勢いで開発が進み、北京の歴史的風景ともいえる古い胡同が次々に取り壊され、住み慣れたこの胡同の町を離れなければならない家族が増えています。

若者は現代的な生活が出来るので喜んで郊外への引っ越しを希望します。しかし、老人たちにとっては住み慣れた町を出るというだけでなく、この地で苦楽を共にしてきた近所の友達との別れにもなるだけに深刻な問題で、いつ、自分たちが住んでいる胡同からの立ち退き命令が下される

かという不安を抱えて日を送っています。

以前は、敷地の中心部の庭を中心として東西南北に部屋を整然と配置した「四合院」も、人口密度が高い北京の住宅事情で、異なる世帯が個々の部屋に入居しており、その各世帯が空きスペースのある庭に向って部屋を増築して、所謂「大雑院」となっているのですが、狭いながらも同じ敷地内に住む人々は、今でも和気藹々と生活を営んでいます。



全体の写真撮影地 中国北京宣武区 2007年1月16日



### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

馬方と約束した時刻に合わせ、広東メンバーと私は4時前には目覚めてベッドの中から抜け出した。中国の四川省は日本と比べて日の出が遅く、あたりはまだ完全な暗闇だ。懐中電灯のわずかな明かりを頼りに宿の入り口に行くと、昨夜の馬方達が自分の馬を連れて待っていた。馬方達は唇に指を当て「静かに」というゼスチャーをして見せると、私達に馬に乗るように促した。

私が目の前にいた馬にそっと跨ろうとすると、馬は私を迎え入れるように身を屈めてくれた。馬を引いている青年に「この馬は判ってるんだね？」とヒソヒソ声で話しかけると、「そうさ。彼らは判ってるんだよ。人の言葉だって理解できるんだ」と微笑みながら優しい手付きで馬の鼻を撫でた。

私達の騎馬隊は真っ暗闇の中を静かに出発すると、洛絨牛場の方向に向かって一列に並びヒタヒタと山道を登って行った。この先のルートが何処へ向かうのかは知らされていなかったが、きっと洛絨牛場を通過してあの宝石の湖のところまで登って行くのに違いない。そして湖の畔から更に山奥に向かって伸びていた道、私が初めてそこに訪れた日「この向こうにはどんな世界が広がっているのだろう・・・」と羨望の思いで眺めていた、あの道に進んで行くのに違いなかった。

初めて亜丁を訪れた時から、ずっと胸の中にひっかかっていた望みが今日叶うのだ。私は馬の背にゆられながら、これから始まる旅への期待と興奮に震える思いだった。

ところがである。暫く山道をすすんでいた騎馬隊は何故だか急に歩みを止めてしまったのだ。

列の後方にいた私には暗闇の中で何が起こったのか判らなかった。馬の背に跨ったまま暫く待っていたが騎馬隊が再び進みはじめる事はなく、不意打ちの様に懐中電灯の光が私の顔に当てられた。目を射る眩しさに思わず顔をそむけた瞬間、私の耳に「なんだ小姐、あんたまで混っていたのか」と、呆れたような声が響いてきた。ハツとして声の主を見返すと私の目の前に懐中電灯の明かりに照らされて浮かんでいたのは管理人の腕章を腕に巻きつけたあの男だ。

「さあ、逆戻りだ。宿に帰りなさい」

「ええ!？」

何が起こったのか判らなかった。

「嫌よ!! 何で戻らなきゃならないの!？」

「君達の馬は許可されていない。君達が行こうとしているコースもだ。さあ、宿に帰ってもう一度眠るんだな」

「ええええ〜っ!! 嫌よ! 行きたい!!」

どうしようもなかった。馬方の指示で馬はノロノロと向きを変え、今来た道をトボトボと引き返し始めた。何かなんだか解らなかったが、夢のホーストレッキングがダメになってしまった事だけは判った。泣き出したいような気持ちで馬の背に揺られているうちに、おぼろげながら状況が読めてきた。

この数日間の滞在で薄々気づいていたのだが、亜丁自然保護区はこんな人里離れた僻地の山奥にありながら観光地として完全に行政に管理されている土地なのだ。自然保護区内の宿も馬も管理局の許可が下りている場所では観光客の利用は許されておらず、その売り上げ金は行政の収益となるようなシステムとなっているのに違いない。馬に乗って移動できる行動範囲も自然保護区の入力から洛絨牛場までと制限されているのだろう。

だがこれも稲城のタクシーと同じで、僻地の寒村に暮らす村人にとって観光客から手軽に高額な現金収入が得られる仕事は魅力的なのだ。そこで彼らは管理人の目を盗み、直接観光客にもぐりの営業をかけているのだろう。

このツアーの出発が日の出にまだだいぶ間のある真っ暗な早朝なもの、音を立てないように気を使いひっそりと出発したのも、管理人にツアーの出発を悟られないための策だったのだ。

だが管理人の方でもそんな彼らの行動パターンを読んでいて、朝まだ暗い早朝から未明のパトロールをしていたらしい。

ついてない・・・

先程までの高揚した気分が破裂してべちゃんこにしぼんだ風船の様な気持ちで宿に戻った。

沖古寺の宿に戻った時もまだ辺りは暗闇につつまれていた。ショックで何も考えたくない。みんな黙ったままそれぞれの布団の中にもぐりこんだ。

数時間ウトウトした後、同室の広東メンバーの話し声で目が覚めた。目を開けると外はとっくに明るくなっていた。

「私達は正規の馬を雇って洛絨牛場まで行く事にするけど、あなた一緒に行く？」

広東メンバーの一人が私に声をかけた。

私だって一度はあの宝石の湖に再び訪れる気持ちになってしまったのだ。このままでは気持ちの納まりが着かないし、旅は道連れ、乗りかかった船だ。

「うん。日本円を両替してもらえるなら私も馬を雇って

一緒に行く。そして牛場から歩いて湖を見に行きましょうよ。私が案内するわ!」

広東メンバーの青年に私の一万円を中国元に両替して貰った。彼は持っていた携帯電話を使って当日のレートを調べようとしたが上手く行かず、私の「多分650元くらいだと思うけど…」の言葉に「判った。君を信じるよ」と心良く両替してくれた。急いで荷物をまとめ、山で必要なもの以外の詰まった大きなザックは沖古寺の宿で預かってもらって私達は出発した。

この日二度目の馬に乗り、私達は洛絨牛場を目指していた。二日前、もうこれでお別れだとなごりをおしんだ宝石の湖にもう一度訪れる事ができると思うと、夢のホーストレックがお釈迦になって意気消沈していた気分も少しは慰められた。せめて今日こそは太陽の光をあびてコバルトブルーに燃え上がるあの湖を見たい。私はしきりに空の状態を気にしていた。薄日が差したかと思うと曇り、曇ったかと思うと再び日が差してくる。天候の状態は安定していなかった。

洛絨牛場に向かってしばらく進むうち、広東メンバーの一人が体調不良を訴え始めた。昨夜から軽い高山病の症状を訴え具合の悪そうな顔をしていた青年だ。徐々に強まってくる頭痛に加えて、吐き気まで感じているようだ。

沖古寺より洛絨牛場の方が標高はだいが高くなる。彼がこれ以上進むのは無理だという事になり、青年とその恋人らしい女の子はそこから宿の方向に引き返して行った。せっかくここまでやってきて何も見られないなんて気の毒だ。

土地の人間でもなくせに人一倍垂丁の自然に愛着を感じ、一人でも多くの人にこの土地の美しさを味わって欲しいなどという気持ちになっていた私は、残念な思いで彼らを見送った。もし今朝のホーストレックが予定通りに行われていたとしても、結局この二人は参加できなかったという訳だ。

ところがである。この旅で二度目の洛絨牛場に到着して馬を降り立った私が振り向くと、広東メンバー残り四人のうち、更に二人が頭を抑えながら全く浮かぬ顔をしていた。メンバーの中ではリーダー格らしくみんなをまとめている男性と、その恋人らしい最初に私をホーストレッキングの仲間に誘ってくれた女性の二人だ。

二人はそそくさと数枚の写真を撮ると、

「ダメだ。頭がガンガンするし胃がムカムカする。これ以上ここには居られないから俺達はこれで山を下る事にするよ」

と、私達に告げた。

「え〜! だって、たった今着いたばかりなのに・・・」

全くなんてことだ。先程まで馬に揺られながら私はまだ

ダメになってしまったホーストレックへの未練が断ち切れずにグジグジと自身の不運を嘆いていたのだが、結局こんな状態では初めからトレックツアーを決行するのは不可能だったのだ。あのまま管理人に見つからずにいたとしても、数キロ先で自発的に引き返して来る事になっていたのだろう。

そう思ったら、ダメになってしまったツアーへの諦めも少しはつくように思えてきた。

だけど湖は!?

「ねえ、あなた達はどうするの!? この先の景色はもっともっと綺麗だし、湖は本当に素晴らしいのよ!! せっかく此処まで来て全員が何も見ずに帰っちゃうなんてもったいない! 私はあなた達に見て欲しいの。私が案内するから行きましょうよ!!」

私は残りの二人に尋ねた。お金を両替してくれた青年とその恋人だ。

私の懸命の説得に二人は興味をひかれたらしく、

「わかったわ。あなたがガイドしてくれるなら行きましょう」と決断してくれた。

ところがだ。せっかく話が決まって張り切り始めた私達に再び水を差すように乗ってきた馬の馬方達が文句を言い始めたのである。

湖までの道のりは私達の足でほぼ3時間。往復してこの場所に戻ってくるのはおよそ6時間後になるが、そんなに待つ事はできないと言うのだ。

私達の雇った馬は沖古寺から洛絨牛場まで往復での契約だった。私は自分の馬を雇う際に、馬は洛絨牛場まで来るための片道だけで十分だと主張したが、先方は往復料金を払わなければ馬はチャーター出来ないと言い張ってひと悶着あり、しぶしぶ往復で雇った馬だというのに、今になって全く面倒な話だ。馬を雇った時点で私達は湖に行く話はしていたし、自分の雨具を持っていなかった広東メンバーには山に行くならコレを持っていけと有料で雨合羽の貸し出しまでされていたのだ。

「私達は湖を見るために此処まで来たんだから、待ってくれたっていいじゃない!? それがあなた達の仕事でしょ!?!」

広東メンバーの女性も私の主張に加勢してくれたが押し問答はいつまでも終わらない。とうとう彼女が言った。

「判ったわ、お金で話をつけましょう。あなた達が待てるという2時間を過ぎたら、1時間につき10元払うわよ。これでいいでしょ!?!」

彼女の提案には馬方達も納得したらしく多少後味の悪い出発になってはしまったが、私達三人は数々の困難を乗り越えて、彼らにとっては初めての、私にとっては再探訪の湖の旅へと出発した。

(次号に続く)

ケニアから帰国して早や6年の月日が流れた。

その間2人の子供を出産し、現在仕事と家事育児をすす中で、日々思い出すことがある。ケニア人ママのその存在のすごさだ。当時私は結婚はしておらず、気ままに孤児院での仕事や自分の研究調査をしたり、ケニア中を旅行したり、自分の立てた予定で人生を送っていた。

その当時27, 8歳の私の存在は、ケニア人からは稀有に映るらしく、「あなたは本当に自由ね」とよく言われたものだ。確かにケニア人は、結婚が早い。高校を卒業する18歳になると、2, 3年のうちにはほとんどが結婚していく。そして子供を産み始める。「結婚適齢期」という言葉があるが、ケニアの女性の結婚適齢期があるとすれば、20歳前

後であるのだろう。健康で、結婚適齢期を10年あまり過ぎていた日本人の私の存在は、ケニア人男性だけでなくケニア人女性にとっても「不思議な存在」として映っていたようだ。子供たちにもよく聞かれた。

「いつ結婚するの？」その度に「いい出会いがあればいつでも」と答えていたが、そう答えるとその子供の親が「お見合い」の話をもってきてくるようになり、答え方を考えるようになった。私が考えた答えは、「神に仕える身だから・・・」そうすると、85%がキリスト教のケニアでは、「そっかあ、悦子はシスターだったのだ・・・」と妙に納得してくれてその後は誰も何も疑問に持たないのである。

ケニア滞在中、何をしても、どこにいても、私の存在が疑問であるケニア人。ウソも方便だ。仕事をするにしても、旅行するにしても、そう説明することで、納得してもらえ、物事がスムーズに運ぶのである。女性の結婚が早く、当たり前前の国においてはそういう嘘も自分の立

場を人にわかりやすくすることによって得られる利点もあるのである。神様も許して下さるといいのだが・・・。

そんなケニアの女性は、結婚すると、子供を一人また一人と産み始め、数年のうちに子供を複数抱え「アフリカンママ」となっていく。都市部ではほとんどのお母さんが仕事を持っており、農村部でも農業に従事しているため、子育て・家事・仕事を日々こなしているのである。



働くケニア人のママ

日本との違いは、前回にも書かせてもらったように「ナニー」というお手伝いさんを雇っていたり、親戚の女の子に手伝いにきてもらったりして、家事と育児を手伝ってもらいながら、仕事と家庭を上手にやりくりしている。

日本は子供が小さいときには、仕事を持つ人は、保育園に入

れるのが一般的であるが、ケニアでは保育園の保育料とナニーの給料を比較すると、自宅に住み込んだりして家事までしてくれるナニーを雇うほうが効率がいいのである。一か月8,000円もあれば、ナニーはお母さんに代わりすべてをこなしてくれるのである。

ケニア人ママのすごいところは、仕事と家事の両立にとどまらない。地域社会のつながりを大切にしている地域においては、同民族が主に集まって、女性グループを作っていることが多い。週末の午後だれかの家に集まって、家族の問題点や日常起る出来事について意見を求めあうのである。

場所は持ち回りで、紅茶やお菓子を頂きながら、集まった女性は、忌憚なく自分の悩みを打ち明けていくのである。会費を集めるグループもあり、その集められたお金は、たとえば学校の授業料が足りないかと相談をしたママに貸し付けられるのである。私もいくつかのグループに入って、ケニア人ママの抱える悩みに耳を傾けた。そ

こでの悩みは、世界中どこでもある悩みである。「旦那が働かない」「給料が下がった」「子どもの教育費が今月は賄えない」「親戚の葬儀費用を援助したい」など・

またキリスト教徒としての女性グループもある。同じ宗派に属する女性たちが集まり、教会のことをはじめ、教会員の相談を受けたり、聖書をともに読んだりして、家庭の中でキリストの教えをどう実践していくかについて話し合ったりする会である。ここでも、「子供が教会で行きたがらない」「奉仕活動の時間が取れない」など自分の悩みを打ち明けていくのである。

ケニア人ママは、このように幾つものグループに属していて、自分の悩みを打ち明けて助けてもらうこともあ

るが、人の悩みを聞いて、自分に出来ることは積極的にしてあげるのである。子供の数が8人や10人いるママが、自分のした経験を基に、常にアドバイスを求められ、何時間も相談にのっている姿が印象的だった。地域の問題を、家庭の問題を、女性たちはグループを通じて、自分たちが主体となって取り組むその姿。ケニア人ママは、本当に働き者であるとともに、地域を良くするために活動する活動家でもあるのである。

日本で子育てする私。ケニア人ママのようにはなれないが、そのエネルギーを見習っていきたいと思う。かつてケニア人ママが私に言った。「一人では生きていけないのよ、この世界は」と。

## アジアを読む(番外)

## 「中国を読む」から「アジアを読む」へ

真中智子

今月から、本欄のタイトルが「中国を読む」から「アジアを読む」に変わりました。理由は、いつもご覧いただいている方々から「もうこれは中国じゃなくて、アジアでは？」というお声を頂いたから。ええ、書いている私もずっとそんな気がしていました、ごめんなさい。締め切りさえ勝手気ままな原稿を受け入れて頂き60数回、気が付けば、原稿の内容は「中国」から「アジア」へ…。

初めて中国へ出かけたのは7年前。JTBのツアーに参加しただけのシルクロード2週間は、私にとってはかなりの冒険でした。理由はたったひとつ。自分の価値観が底から覆されたから。

もともと未だに東京を離れて暮らしたことがなく、狭い世界にしか生息していない私。その前の年に、北海道・網走で流氷を見て「この海が日本?!」とのたまい、連れてきてくれた北海道出身の友達と絶交直前までいった経験を越えて、さらにシルクロード、エリア的にはウイグル自治区は衝撃的でした。

いやいや、ウイグル自治区が、ではなかった。その旅行先の人々の生活が、自分の生活とは異なるという点が衝撃的でした。町からホテルまでの夜道に、ひとつの電灯もなく、空に、これぞ本当に満天のというべきミルクウェイが広がっていた、そのことだけで

も、ショックでした。

飛行機で数時間いった先の人々は、私の持っていない宗教を大切に、市場には羊の首が転がっており、豚の死骸、犬の開きが普通に売っている。それは、本当に衝撃でした。

あのときの衝撃が、私を中国にぐっと引き寄せ、その後何度か中国に足を運びました。でも、あのときほどの衝撃を得ることは一度もありませんでした。飛行機で20数時間かかる国へ行っても、ありませんでした。今では、あの旅は、初めて異なる世界に触れて得られた貴重な経験だったのだと。少しずつ私もアジア全般に目が向くようになり、そうなると、世界はすべて繋がっているような気になってくるもの。

ただ、その繋がっている感が、読書や旅行でしか得られない自分の鈍さや自分の世界の狭さが哀しくもあり。でも、あの中国との「出会い」があって、「わんわりい」との「出会い」があったわけで。私にとっての大切な「何か」は中国から始まったんだと、改めて感謝したりして。

以上、本欄が「アジアを読む」になった言い訳？ でした。今後とも、なんとなく目を通していただけましたら嬉しいです。



エスニック焼鶏販売の'わりい'のブース



楽しそうに踊りを披露する西東京朝鮮第二初中級学校の生徒さんたち

11月1日(日)、今年で12回目を迎える、恒例の町田発国際ボランティア祭・2009夢広場が、昨年と同じ「この星に平和と希望を」のテーマの下、「ぽっぽ町田」イベント広場で開催されました。

今年は、14張りのテントに16団体が出展し、去年にも増して賑やかでした。出展の内容は、各団体に関わる国々の雑貨や食料品・料理の販売、外国の人々に日本を紹介するお茶席の設置や会員手作りの小物販売、国際児童画カレンダーの販売、活動関連の展示などさまざま、活動資金を得るための古着の販売もあり、



来賓としての挨拶の在日スリランカ大使館チャンダナ・ウエーラセナー一等書記官

ステージの裏では児童絵画の展示と盛りだくさんでした。

仮設ステージでは、ケーナや馬頭琴、ウクレレの演奏や、ラテン音楽のバンド演奏、西東京朝鮮第二初中級学校・生徒さんの民族舞踊、バリ舞踊、フラダンス2組、野津田高校手話部の手話ダンスなど楽しい出し物が続きました。又今年は初めて、スリランカ大使館の協力で、スリランカの紹介やスリランカ風キャンドルサービスなども執り行なわれたり、飼い主のいない動物達の里親探しをしているNPO法人フレンズ・オブ・アニマルズが可愛い犬や猫たちを連れてステージに上がったり、これまでにない試みがステージの催しに厚みをつけました。

首にバンダナを巻いた犬たちがステージに上がると、バリ舞踊やフラダンスとは一味違った可愛らしさで観客を魅了していました。捨て犬からセラピー犬になったケースや飼い主探しの活動の様子なども紹介され、ご苦労の多い活動のようですが、ステージのアピールで共感と支持を得て、より多くの不幸な犬猫が救われて欲しいも

のです。地球は人類と万物の共生によって成り立つ星です。祭のテーマ「この星に平和と希望を」を考える時、我々の身近にいる犬猫の幸せも我々の責任だと痛感しました。

ところで当日は、「晴れるが夕方から荒れ模様」という天気予報でした。朝のうちは予報通りよく晴れていましたが、予報より早く、昼過ぎから突風が吹き始め、時折強烈に吹き抜ける強風に、思わずテントのポールを掴んで飛ばされないようにと身構えるほどで、あちこちで並べた商品がさらわれたり、用意した紙袋

が空のまま舞い上がったり、ゴミ箱の紙くずまでも躍り出てくる始末でした。

わりいとは、例年と同じく遊牧民スパイスを使ったエスニック風味の焼き鶏で参加。始めは売れ行きが鈍く心配しました。しかし、今年の「焼き鶏職人さん」は有能で、焼き鶏の串を返ししながら、前を通る人に軽妙な声掛けをし、見習った売り子一同も、交代で舞台を楽しんだり、各テントを物色しながら「職人さん」の名調子に合わせて呼び声を上げ、どうにか2時過ぎに完売。楽しい一日でした。

参加団体の関係者同士が旧交をあたためたり、ふらりと祭に参加の人が、リサイクル品の中から気に入った衣類を見つけてニコニコしながら帰ったりなど眺めていて楽しい光景がたくさんありました。

忘れてならないことがもう一つ。成瀬高校ボランティア部の生徒さんが、会場準備や整理にボランティア参加して、力を貸してくれました。2009夢広場は、年代を超えた善意の結集で運営されたのです。

(報告者：有為楠君代)



## 世界中の子どもたちにサンタを！ “クリスマス ライフ”

同時開催！町田市内の国際支援と友好の各団体が、世界に向けて発信する愛のバザール  
あなたの暖かな心がこもるクリスマスプレゼント・世界の民芸品ががいっぱい！！

2009年12月19日(土) 雨天決行(屋根あり) 12:00～16:30

於：**町田ターミナルプラザ市民広場** 町田市原町田3-1-4



- JR町田駅ターミナル口直結ショッピングモール「ミーナ」隣接
- 町田バスターミナル2F(JR町田ターミナル口より徒歩1分、小田急町田より徒歩6分)

**出演：**山下孝之(ケーナ)/永瀬征博(馬頭琴)/田村カナ(バリ舞踊)/モスキート(現代音楽)/魔法の手(手話ダンス)  
小川ブリジット(ギター&フォークソング)/レインボーチルドレン(ダンス&合唱)

**参加団体：**NPO法人ネパールミカの会/NPOフレンド オブ アニマル/社団法人アムネスティ町田グループ  
日本国際連合協会町田支部/アジア草の根支援/アジアアート交流促進会/エスペランサ  
日中文化交流市民サークル'わんりい'/町田プラン・ジャパン・レインボーチルドレン (順不同)

**主催：**“世界中の子どもにサンタを”実行委員会 **共催：**町田ターミナル周辺活性化協議会  
**後援：**(財)町田市文化国際交流財団



あなたの手元で愛されることを祈って、

ラオス山の民・モン族の美しい刺繍小物

**\*シヴィライ村の女性たちのハンディクラフト\*販売します**

それはとても丁寧に刺された美しいクロスステッチの刺繍です。ラオスの山の民・モン族は伝統的手仕事として衣服などにクロスステッチ刺繍を施しています。

今回、販売の作品は、「ラオス・山の子ども文庫基金」を立ち上げ、ラオスの山中の村に子どもたちの図書館を建設、その読書指導などでしばしばラオスを訪れ滞在の安井清子さんが、その活動の拠点としているシヴィライ村の女性達が作った、ポシェットやお財布、小袋等です。

安井さんが一つ一つ吟味し、厳選して持参しました。村の女性たちが丁寧に一針一針心を込めて、びっしりとクロスステッチで埋め尽くされ、どれもこれも甲乙つけ難い、針を刺す息づかいを感じるような素晴らしさです。

購入された作品は、きっといつまでもあなたの手元で愛され使用されるでしょう。尚、収益は100%「ラオス・山の子ども文庫」に贈られます。(田井)



### 【モンの刺繍作品について】

「ラオス・山の子ども文庫基金」 代表・安井清子

シヴィライ村は、ラオスの首都、ヴィエンチャンから車で3時間ほど離れたところにあり、山を開いて畑を作り、ぎりぎりの自給自足の生活をしています。でも、農地が足りないので実際には食べる米も十分には獲れず、現金収入もありません。そこで、村の女性たちは畑仕事の合間に一生懸命刺繍を作っています。刺繍が、不足した食料を買うお金、ノート代、そして、薬代となっています。小さい女の子もお母さんの隣に坐って教わりながら、一針一針、村のみんなが刺繍のハンディクラフトを作るようになりました。

女性たちは、生活の為に必死で作っているのですが、ある時、一人のお母さんが言いました。

「私たちの刺繍はとてもきれいよね。私は、自分の刺繍が好きよ。以前より上手になったと思うわ。」

私はそれを聞いて、刺繍が女性たちの創作の場となっていて、彼女たちが自分たちが作り出すものに自信と誇りを感じていることを知り、とても嬉しかったです。女性たちが、自分たちが作り出すもので生活を支える力となっていて欲しいと思います。是非、そんなことを心の片隅に思いながら、モンの女性たちの刺繍のクラフトを使っていたら嬉しいです。

問合せ：☎042-734-5100(田井)

ドキュメンタリー映画「チョコラ」上映  
と パネル・ディスカッション

▶ ケニアの路上から日本の路上へ ◀



ケニアの地方都市、ティカの路上に暮らす少年達。不登校・家庭不和・薬物中毒・そしてエイズなど、しかし、それは日本の問題に意外と近いのでは…。

- ◆ 2009年19日(土) 14:00 ~ 17:00 (その後、親睦会)
- ◆ 於：和光大学J棟 301室
- ◆ 参加：無料

- パネルディスカッション・パネラー
  - ・小林茂(映画「チョコラ」監督)
  - ・管啓次郎(明治大学大学院デジタルコンテンツ係)
  - ・西研(和光大学現代人間学部・現代社会学科)
  - ・ロバート・リケット(和光大学現代人間学部・現代社会学科)

主 催：和光大学現代人間学部・現代社会学科  
後 援：川崎市教育委員会連携事業 / 町田市教育委員会  
問合せ：和光大学教学支援室：☎044-989-7487

Garey & Kamal ~大石一馬フォトギャラリー・カマル~

◆◆◆ 三人展・それぞれの旅 ◆◆◆

楠本未来(写真)・坂育夫(版画)・雪嶋淳(水彩)  
12月10日(木) ~ 12日(土)

- 最終日：クリスマスピアノコンサート
  - ・演奏：関本幸子 曲目：バッハ「G線上のアリア」他
  - ・旅の話：坂育夫他

於：Garey & Kamal ~大石一馬フォトギャラリー・カマル

<http://kamal.exblog.jp/>

主催：「花の会」歳末助け合い募金事業  
問合せ：カマル TEL/FAX：@42-791-0148

中国伝統演劇の見方と楽しみ方

~~ 京劇・変面・雑技 ~~

2010年1月23日(土) 19:00・開場18:30

- ◆ 於：国分寺市立いずみホール
  - 〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-36-12
  - JR中央線・武蔵野線西国分寺駅南口より徒歩1分
- 2,000円(全席自由席)
- ◆ 問合せ：張紹成友の会 TEL/FAX 042-382-7367
- ◆ 主 催：国分寺市立いずみホール

中国文学史きっての女傑登場!

《新潮劇院 京劇》

『楊家将演義』~穆柯寨・穆天王・韓門斬子~  
出演：張桂琴 張春祥 他

1月31日(日) 16:00開演  
(全席指定・字幕付き)

於：成城ホール  
<http://seijohall.jp/index.html>  
〒157-8501 世田谷区成城6-2-1  
小田急線「成城学園前」駅徒歩4分



一般：4,300円 世田谷区民：3,800円  
高校生以下：2,000円 (当日券は各500円増)

- ◆ 作・演出：張春祥 ◆ 企画・制作：新潮劇院
- ◆ 後援：中国大使館文化部 / 世田谷区
- 問合せ：新潮劇院 TEL/FAX:03-3484-6248
- チケットのお申し込み  
E-MAIL ... [ticket@shincyo.com](mailto:ticket@shincyo.com)  
TEL ... 080-3486-3352(担当：梅木)

■ 楊家将演義とは？  
「三国志演義」「水滸伝」などと並び、中国では広く親しまれている。古典文学で、宋の国に使えた楊一族の盛衰を綴った物語です。中国ではテレビドラマなども放送され、京劇でも「三岔口」や「四郎探母」など、多くの演目がつくられています。

【12月の定例会】12月14日(月) 13:30 ~  
【新年号のおたより発送日】12月28日(月) 13:30 ~  
◆ 共に 於：田井宅

美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている!!

!!! 2010 'わんりい' 新年会へようこそ !!!

於：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)  
2010年1月31日(日) 11:00 ~ 14:00

- 定員：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 (会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：[wanni@jcom.home.ne.jp](mailto:wanni@jcom.home.ne.jp) TEL/FAX：042-734-5100
- 新年会メニュー：1.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談  
2.ビンゴ 3.お笑い福引 4.他

